

## 出雲郡家関連遺跡群第6次発掘調査概報



1998年3月

島根県斐川町教育委員会

## 序

斐川町教育委員会では平成9年度の国庫補助事業として出雲郡家関連遺跡群の第6次発掘調査を実施しました。

出雲郡家関連遺跡群を発掘調査するきっかけは、平成3年度に県道の拡幅工事に伴う後谷遺跡の試掘調査を行ったところ、大きな礎石が炭化米とともに発見されたことによります。これは風土記の記述からみて、出雲郡家に付隨する正倉跡ではないかとして注目されました。

翌4年度からは国庫補助事業として正倉跡の範囲確認調査を行いました。正倉跡の調査は7年度で終了し、8年度からは郡家施設の中でも中心庁舎となる郡庁域の所在を確認する調査を行っています。

今年度は後谷遺跡の東方300mに位置する小野遺跡の調査を実施することになりました。小野遺跡も官衙的な遺跡とみられているため、今後の継続的な調査で全容が明らかになるものと期待しています。

本書が風土記研究の一助となり、広く埋蔵文化財に対する关心と理解を高めることに役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、本調査に快く協力いただいた地権者の陰山 勇、鬼村博己両氏はじめ地元各位、終始ご指導いただいた奈良国立文化財研究所、島根県教育委員会並びに諸先生方に厚くお礼申し上げます。

1998年3月

斐川町教育委員会

教育長 村上家次

## 例　　言

1. 本書は斐川町教育委員会が平成9年度に国庫補助事業として実施した山雲郡家関連遺跡群第6次発掘調査概報です。
2. 本年度調査した遺跡は小野遺跡、調査区は10区です。所在地は斐川町大字神水1,123番地外です。
3. 調査組織は次のとおりです。

事務局 富岡俊夫（斐川町教育委員会文化課長）、昌子裕江（同係長）

調査員 宍道年弘（斐川町教育委員会文化課主任）、松本堅吾（同主事）

調査指導 山本 清（島根大学名誉教授）、田中義昭（同法文学部教授）、  
徳岡隆夫（島根大学汽水城研究センター長）、山中敏史（奈良  
国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長）、池  
田敏雄（斐川町文化財保護審議会委員）、柳浦俊一（島根県教  
育委員会文化財課文化財保護主事）

遺物整理 青木由美

4. 地質調査・分析は㈱日新技術コンサルタントの中村唯史氏にお願いしました。
5. 本書で記載した「遺跡地図」は、平成4年3月に斐川町教育委員会が発刊  
した『遺跡分布調査報告』に附した「埋蔵文化財分布図」(1:20,000)の部  
分を使用したものです。
6. 本書執筆・編集は宍道が行いました。また、中村氏には玉稿を賜りました。
7. 本調査によって得られた資料は、斐川町教育委員会で保管しています。
8. 本調査にあたっては、次の方々のご協力をいただきました。記して謝意を  
表します。

助言・指導 佐藤 信、上原真人、西尾克己

地元協力 陰山 勇、鬼村博己、青山 保、小豆沢敏子、伊藤トヨ子、  
伊藤花枝、陰山トミエ、陰山百合子、黒田哲子、昌子安正、  
昌子芳夫、高橋重雄、富田 清、野津大吉、長谷川房夫、  
原 定雄、樋野行雄、樋野喜久、古川定夫、山根作夫

（以上、敬称略・順不同）

## 調査に至る経緯と経過

本遺跡は、平成3年度に県道木次直江停車場線緊急地方道路整備事業に伴う事前調査で発見されました。この時の調査で古代～中世の土器とともに多量の炭化米や礎石建物の一部が確認されました。その後、4～7年度において国県の補助金を受けて周辺の範囲確認調査を行いました。一連の調査の結果、4年度に総柱の掘立柱建物2棟、総柱の礎石建物2棟、側柱のみの礎石建物1棟、5年度に礎石建物1棟、6年度に礎石（建物であるかどうかは確認していない）1個、溝状遺構1条、柵列1条、7年度に溝状遺構2条を検出することができました。

これらの建物群は、直列配置をとり規格性があること、建物の周辺に多量の炭化米を伴うこと、4×3間以上の大型の建物であること、出土遺物から奈良～平安時代初め頃に存在していたことなどから、一般の集落でみられる倉とは違い、官衙など公の倉庫に共通した特徴がみられます。従って、郡家施設の中で稻の収納に関わる「正倉」遺構である可能性が極めて高いことがわかり、その範囲はほぼ東西150m、南北120mを推定することができました。

このように正倉の規模・範囲等が概ね明らかとなりましたので、平成8年度からは、郡家施設の中で最も中心的な役割をもつ「郡庁」の位置を確認することを目的として調査を開始することにしました。郡庁と正倉はまさに政務と税務を管理する郡家建物の中心をなすと考えられます。

8年度は、平成4年に調査しました稻城遺跡のすぐ北側の水田部を調査しましたが、郡庁に伴う明らかな遺構を検出することはできませんでした。しかし須恵器の平瓶（水差し）や製塩土器などが出土したため、周辺に官衙的な遺構が存在する可能性を残しました。



図1 小野遺跡調査区位置図

## 位置と環境

島根県東部に位置する斐川町は、豊かな穀倉地帯である北部の篠川平野と、仏経山や大黒山を中心とする南部の丘陵地帯から成り立っています。

小野遺跡は斐川町大字神水地内に所在し、現況は水田がほとんどです。遺跡の北側は標高8m前後の水田が広がり、南側は標高190m以下の山々が連なっています。

周辺には、古代から中世にかけての遺跡が数多く存在しています。縄文時代では、磨消縄文を施した晚期の突堤文土器や打製石斧が多く出土した出西の後谷遺跡をはじめ、直江の結遺跡（早期末～前期初頭）や三絡の武部遺跡（後期）、神水の上ヶ谷遺跡（中期初頭・中期末）が知られています。

弥生時代には全国的にも貴重な青銅器埋納遺構が知られています。昭和59・60年に銅劍358本、銅矛16本、銅鐸6個が発見された神庭荒神谷遺跡は、平成8年10月に39個の銅鐸が出土した加茂町の加茂岩倉遺跡とともに弥生時代の出雲と他地域との交流を考える上で重要です。弥生時代の集落関連の遺跡としては、後谷遺跡から少量の前期・中期末の土器が出土しているほか、三絡の宮谷遺跡、神庭の西谷遺跡、斐伊川鉄橋遺跡から中期末～古墳時代初めの土器が出土しています。これらは本格的な調査はなされていませんので、遺跡の規模や性格はわかっています。

古墳時代に入って、中期には神庭岩船山古墳（推定全長57m）や学頭の軍原古墳（現存長30m）、小丸子山古墳（径35m）の前方後円墳や円墳が尾根上または縁辺部に築かれます。中期末～後期になると、尾根上に直江の結古墳群、神水の城山古墳群などの小規模古墳群、山麓や丘陵斜面に三絡の武部西古墳、出西小丸古墳群、阿宮の高野古墳群、布子谷古墳などの石棺式石室系の横穴式石室墳が築かれます。さらに、上直江の平野横穴墓群、出西の山の奥横穴墓群、学頭の大倉横穴墓群に代表されるような横穴墓群が斜面に群集して築かれるようになります。

奈良時代になると谷々で多くの遺物が散見されます。733年に制定された『出雲國風土記』には、地名の由来、特産物、古老の伝承などほかに、神話や郡家、軍団などが記されています。それによると、現斐川町は出雲国出雲郡に属し、健部郷、漆沼郷、河内郷、出雲郷、神戸郷が町内域に所在していました。また、出雲郷の条には「即郡家属」とあり、郡家の施設が郷内に置かれていたことがわかります。

寺院関係としては、神水の小野遺跡や出西の稻城遺跡から奈良時代前期、阿宮の天寺平廐寺から奈良時代後期～平安時代初期の瓦類が発見されており、この地域の初期仏教文化を考える上で重要な遺跡です。

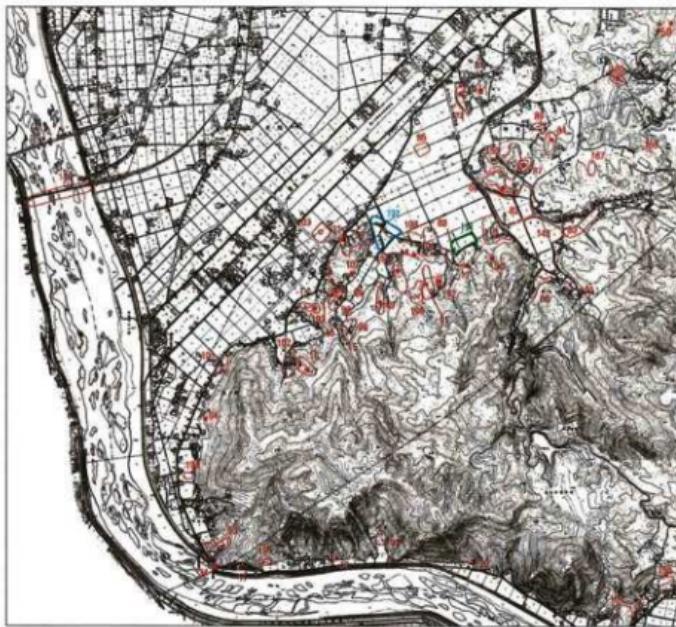


図2 後谷遺跡・小野遺跡と周辺の遺跡

- |               |               |                 |
|---------------|---------------|-----------------|
| 12. 外ヶ市古墳     | 84. 神水古墳群     | 104. 下阿宮 I 遺跡   |
| 13. 出西小丸古墳群   | 85. 神守 I 遺跡   | 105. 下阿宮 II 遺跡  |
| 15. 稲城古墳群     | 86. 和西 I 遺跡   | 107. 後谷町道脇古墳    |
| 16. 山ノ奥横穴群    | 87. 城山東古墳群    | 116. 氷室Ⅲ遺跡      |
| 17. 海の平横穴群    | 88. 外ヶ市 I 遺跡  | 119. 斐伊川鉄橋遺跡    |
| 18. 八幡宮横穴     | 89. 神守 II 遺跡  | 143. 氷室IV遺跡     |
| 19. 岩穂上横穴     | 90. 新在古墳      | 158. 稲城丘陵古墳群    |
| 20. 岩海横穴群     | 91. 長者原古墳群    | 159. 城山城跡       |
| 26. 横手古墳      | 92. 上出西 I 遺跡  | 166. 有間谷遺跡      |
| 32. 出西・伊波野一里塚 | 93. 上出西 II 遺跡 | 167. 有間谷 II 遺跡  |
| 33. 沢田横穴群     | 94. 刃先横穴群     | 174. 神守城跡       |
| 34. 出西岩槻跡     | 95. 後谷横穴群     | 190. 和西 II 遺跡   |
| 44. 後谷古墳      | 96. 後谷 I 遺跡   | 191. 小野遺跡       |
| 45. 登道古墳      | 97. 後谷 II 遺跡  | 192. 押屋古墳群      |
| 49. 後谷東古墳     | 98. 後谷 III 遺跡 | 193. 後谷丘陵古墳群    |
| 54. 城山古墳群     | 99. 後谷 IV 遺跡  | 194. 中出西 II 遺跡  |
| 56. 三井古墳      | 100. 神水三メ田古墳群 | 195. 海の平遺跡      |
| 81. 神守古墳群     | 101. 中出西 I 遺跡 | 196. 郡家(長者原)推定地 |
| 82. 氷室 I 遺跡   | 102. 山ノ奥 I 遺跡 | 197. 後谷遺跡       |
| 83. 氷室 II 遺跡  | 103. 沢田 I 遺跡  | 198. 稲城遺跡       |

## 調査の概要

### (1) 調査の目的と調査区の設定

郡庁域の所在確認のための調査は昨年度に続き2年目になります。小野遺跡を調査した目的は、平成5年度に県道拡幅工事の事前調査（以下、県道拡幅部という）で本遺跡を調査した時に官衙的な遺構遺物が発見されていたため、今回はその性格や範囲を調査し郡庁であるかどうかを確認することになりました。

この時の調査では、奈良～平安時代にかけての掘立柱建物5棟以上、溝状遺構2条や須恵器、土師器、土師質土器、円面硯、墨書き土器、丹塗土器、漆塗土器、土馬、瓦類などの遺物が確認されました。遺構の規模や配置、遺物の内容からみて、公的な施設か在地有力者の居宅があったのではないかと考えられていました。

今年度設定しました調査区は、県道より北側の牧草地（標高8.4m）とさらに北の水田部（標高7.7m）です。調査区番号は第1次調査（平成4年度）から通算で10区とし、グリット毎にa～d区の孫番号を付けました。

当初、南北方向に長くトレンチを設けることで、県道拡幅部で検出された建物遺構が北側へどこまで続くのかを探ろうとしました（10a区と10b区）が、遺構がほとんど認められなかったので、近接して別の調査区（10c区と10d区）を設定することにしました。10c区は10a区で礫溜りが集中して東西方向に出土しましたので、さらに東へ続くものかどうかを、10d区は県道拡幅部で検出された遺構の北側で関連遺構が見つかるかどうかをそれぞれ確認するために設けました。

各調査区の大きさは以下のとおりです。

- 10a区 南北26m、東西6m • 10b区 南北5m、東西6m
- 10c区 南北10m、東西4m • 10d区 南北6m、東西24m

調査面積は370m<sup>2</sup>になります。

### (2) 調査地の堆積状況

10a区の北寄りで水田下1.9m、南寄りで1.2mまで掘り下げると小礫混じりの青灰色土層が検出されました。この層は県道拡幅部の調査で、奈良～平安時代の建物遺構が検出されたのと同じ層で北へ向かって徐々に低くなる堆

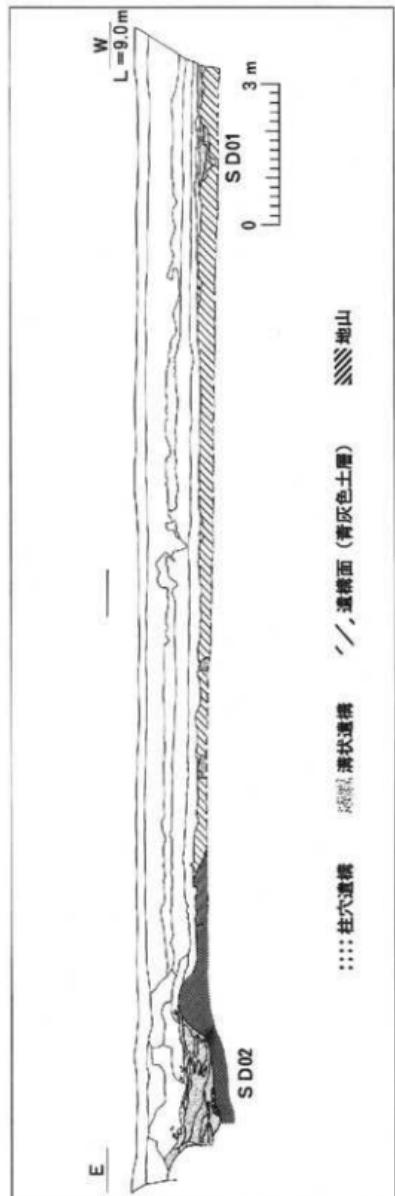


図3 10d区南壁東西断面図

積をしています。また、調査区の北側を深掘りしましたところ、青灰色の礫層と粘質土層が互層となって2m以上も堆積していることがわかりました。これらの層は後背の山から流出した堆積層とみられ軟質の小礫を含んでいますが、奈良～平安時代以降は安定した層であったと思われます。

この青灰色土層は10b区では水田下1.5m、10c区では北側で1.6m、南側で1.45m、10d区の西側では水田下1.3mで確認され、10d区の遺構もこの層で検出されました。なお、10d区の東寄りでは、県道の南側からかつて延びていた丘陵の北端にあたるものと思われ、表土下0.85mで黄褐色の地山が現れました。地山は徐々に北と西方向に低くなる旧地形を呈しています。

ところで、10a区の北西寄りの水田下1m位で川砂が5～10mの厚さで薄く見られ、上下の層にも若干の砂が混入していましたので、一時期ではありますが調査区周辺にも斐伊川の影響による砂の流入があったものと考えられます。

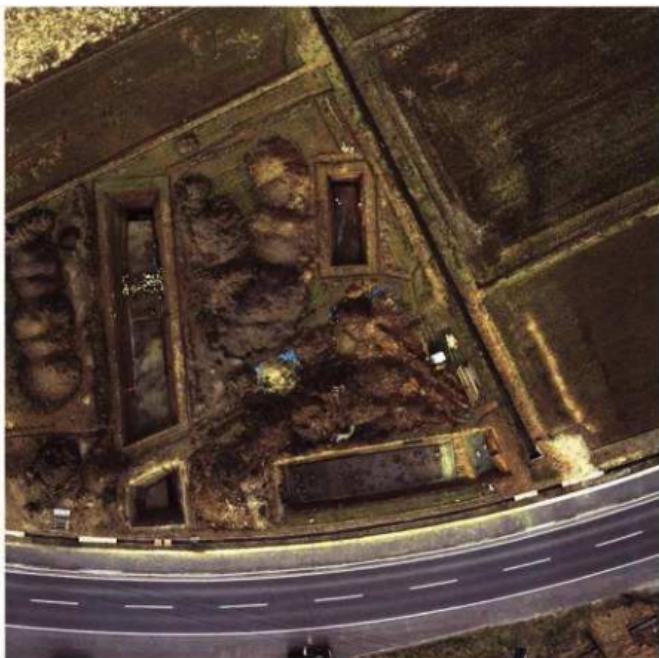


写真1 小野遺跡10区全景

### (3) 検出した遺構と遺物

#### 10a区

**礫 濡 り** 径30cm以下の礫（安山岩や流紋岩など）が東西2.3m、南北1.3mの範囲で木や土砂とともに堆積していました。礫は浮いた状態のものが多く、木は自然木がほとんどです。礫の一部に焼けた痕跡が認められ、木の大半は炭化しています。これらの礫が地山には含まれず、木も周囲には存在しないことから、人為的に運ばれたものと思われますが、例えば、築地や石垣などのような基礎構造が認められないこと、溝などの凹状のところに堆積した様子はないことから、遺構として扱いにくく、その性格は今のところ不明といわざるを得ません。

**出土遺物** 10a区から出土した遺物は多く、特に青灰色土層直上の黒灰色土中から多く出土しました。古墳時代前期の古式土師器壺、後期の須恵器蓋壺、奈良時代以降の須恵器蓋壺、壺、甕、円面鏡3片（写真9）が出土しています。土師器では甕の他に竈片、甕の把手、土製支脚の把手（写真13）などの生活用具が目を引きます。その他、土師質土器の楕、皿、高台付壺や白磁、丸瓦、炉壁片等があります。

#### 10b区

**柱穴** 柱穴が一つ見つかっています。径69cmの掘り方に径20cmの柱根が遺存し、底に礎盤状の石が置かれています。

**出土遺物** 出土した遺物は少なく、奈良時代以降の須恵器の蓋壺、甕の把手や土師器の甕が堆積土から出土しています。

#### 10c区

**杭状遺構** 径11cm、深さ10cmと小さなもので先端は尖っています。

**小土坑** 東西40cm、南北45cm、深さ3cmの三角形状の浅い小土坑です。

**出土遺物** 全体として遺物は少なく、青灰色土より10cm浮いた所で木製下駄、堆積土から漆塗楕（花文）、土馬（体長11cm）（写真12）が出土しました。小土坑からは土師質土器の皿が出土しました。

#### 10d区

**建物遺構** SB01は、東西3間以上、南北1間以上の掘立柱建物跡です。東側はSD02によって削平されていますが、おそらく、桁行4間の東西棟になるのではないかと思われます。柱間寸法は桁行8尺等間、梁行8尺を測ります。柱穴は一辺70~85cmでいずれも方形状を呈しています。P1は径21cm、P5は径15cmの柱根が認められます。

SB02は東西3間以上、南北1間以上の掘立柱建物跡です。P1~P4とともにSB01のP1~P4を切って掘られています。柱間寸法は桁行7尺等間、梁行7尺を測ります。柱穴は一辺60~80cmの隅丸方形をしています。P1、P2、P5で柱痕跡が、P3で礎盤状の石が確認されています。

SB03は東西2間以上、南北1間以上の掘立柱建物跡です。P1、P2がSB02のP2、P3と切り合い関係にあります。

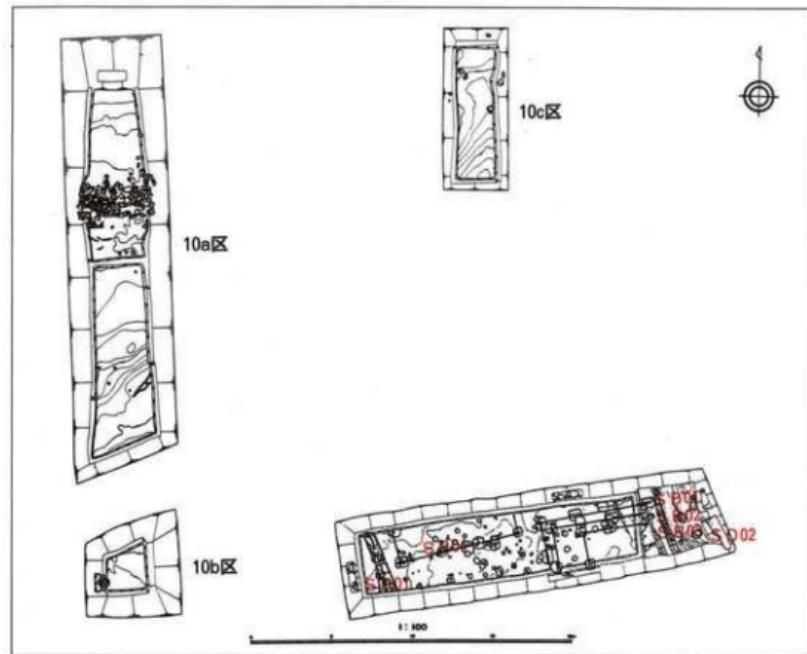


図 4 10 区 平面図

柱間寸法は桁行西から6尺・7尺、梁行は7尺となります。P 2、P 3で柱痕跡が認められます。

SB04は、東西3間、南北1間以上の掘立柱建物跡です。柱間寸法は桁行西から9尺、8尺、9尺、梁行は7尺を測ります。柱穴は一辺62~85cmの方形のもの(P 1、P 3)と、径60cmの円形のもの(P 2、P 4)とがあります。

これらの建物の柱穴とは別に一辺55cm前後の大型の柱穴がいくつありますが、建物の柱穴になるかどうかは今のところ不明です。

溝状遺構 SD01は検出した長さ4m以上、幅0.75~1.2m、深さ0.15mを測り、溝底はかなり凹凸があります。埋土には暗青灰色砂礫土が入っていました。



写真1 10a区礫灘り（北から）



写真2 10a区礫灘り（西から）



写真3 10d区全景（西から）



写真4 10d区S B01~03（西から）



写真5 10d区S D01（北から）



写真6 10d区S B04. P 1

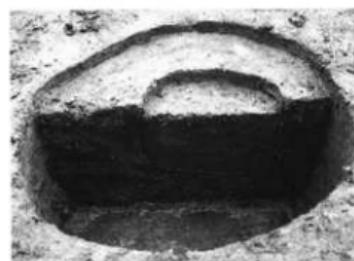


写真7 10d区S B04. P 4



写真8 10a区S D02（北から）

S D02は検出した長さ4.2m以上、幅は3.5m以上、深さ0.7mです。溝の西側の掘り込みは地山検出面で良くわかりましたが、東側は調査区外に続くものとみられます。溝内は暗灰色土と青灰色砂礫土が幾層にもなり複雑な堆積を呈しています。溝底近くに径70cm以下の礫が4個、須恵器、土師質土器が出土しました。

#### 出土遺物

10d区からは多くの遺物が出土しました。古墳時代前期の古式土師器壺、古墳時代後期の須恵器蓋坏、奈良時代以降の蓋坏、壺、甕のほか、風字硯1(写真9)、転用硯2、墨書土器1(写真11)があります。土師器では甕のほか瓶の把手、土製支脚の把手(写真13)、丹塗土器、土師質土器の皿、台付坏、壺がありました。その他、軒丸瓦4、丸瓦(写真10)が出土しました。S D01からは流木3、土製支脚の把手、須恵器、土師器、ももの種子1が出土しました。

#### (4) 出土した遺物の概要

出土した遺物のうち、須恵器(蓋1、坏4、盤1)、土師器(坏1、盤1)、土師質土器(皿1、坏、台付坏1、脚付皿1)、墨書土器1を図示しました。

図5(1~6、13)は須恵器で、蓋(1)は低い輪状つまみをもち、端部は垂下するものです。口径は15.2cm、器高は2.9cmを測ります。外面にヘラによる2本の刻線が見られます。坏(2)は口径13.8cm、器高4.45cmを測り、体部は内湾して立ち上がり、端部近くはややくびれています。底部には回転糸切り痕が残ります。坏(3)は口径12cm、器高3.6cmを測り、体部は比較的厚く作られています。底部は回転糸切り痕が認められます。坏(4・5)は高台がつく坏部で、(4)は比較的高く外方へ開く高台、(5)は低い高台をもつものです。(4)の底部にヘラによる刻線があります。盤(6)は高台がつく盤の底部とみられ、復元すると13.8cmを測ります。坏底部の器厚が厚いわりには高台は貧弱にみえます。(13)は墨書土器の回転糸切り痕を残す坏底部で外面に墨の一部が認められます。

(7・8)は土師器で、坏(7)の口径は13cm、丸みのある体部から外傾する口縁部をもち、全体にろくろ痕が明瞭です。盤(8)は復元口径20cmを測り、器厚は薄くつくられています。

(9~12)は土師質土器で、(9・10)の体部は逆八の字状に開くもの(9)と高台状の低部をもつ(10)とがあります。坏(11)は八の字状に開く高台をもち、脚付皿(12)は柱状の脚を有します。いずれも底部に回転糸切り痕を残しています。

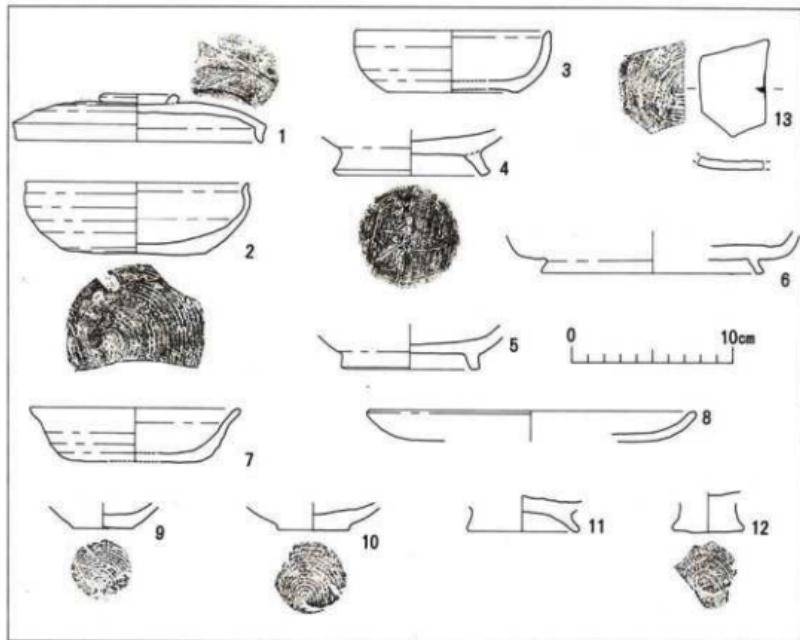


図5 10区出土遺物実測図 (10a区 3・4・9・11  
10d区 1・2・5・6・7・8・10・12・13)



写真9 円面硯・風字硯



写真10 軒丸瓦・丸瓦



写真11 墨書き土器



写真12 土馬



写真13 瓶・瓶・土製支脚

## ま　と　め

平成5年度の県道拡張部の調査では、側柱の掘立柱建物4棟以上、総柱の掘立柱建物2棟、溝状遺構2条などが確認され、建物や柱穴の規模、出土遺物から官衙的な遺構であるとみられていました。今回はその範囲と性格を把握することを目的として、道路の北側に調査区を設けました。前述しましたように、結果は明らかに役所のどの施設であるといった遺構・遺物を検出するには至りませんでした。しかし、建物群の北側の限界がほぼつかめたこと、建物群は南から延びる小丘陵の西側に立地すること、今回も官衙的な遺物が出土したことなどが明らかになったことは収穫がありました。

少し詳しくみると、遺構については建物群は2つの小溝と小丘陵で東西に区画されていることがわかります。東側の区画は（ちょうど10d区と県道拡張部を併せた範囲になりますが）、西側の溝（SD01）から東側の小丘陵までは20mを測ります。5棟以上の建物が建っていますが、切り合い関係や方位から時期差があるようです。西側の区画は県道拡張部（10b区の南側）で確認されており、西側の溝から東側の溝（SD01）までは25mを測ります。この内に総柱建物を含む4棟以上が建てられ、ここでも時期差があります。これらの建物群は柱穴の規模・形状から一般の集落では見られない大きな建物であったろうと思われます。

出土遺物からは、硯や墨書き土器あるいは瓦類も出土していることから、役所あるいは寺院関係の施設が想定されます。そのほか、甕や瓶、竈、土製支脚などの生活用具が出土しています。遺構のなかで倉庫建物があることを考えると、役所関係とみると当初想定していた郡庁ではなく館とか厨家、寺院関係とみると雑舎風の建物、いま一つは在地の有力豪族の居宅の一部の可能性を想定することができるのでないかと考えていますが、今、早急に結論を出すことはできません。いずれにせよ、今後周辺の継続かつ計画的な調査で明らかになるものと期待しています。



写真14 小野遺跡（平成5年度）県道拡幅部（西から）

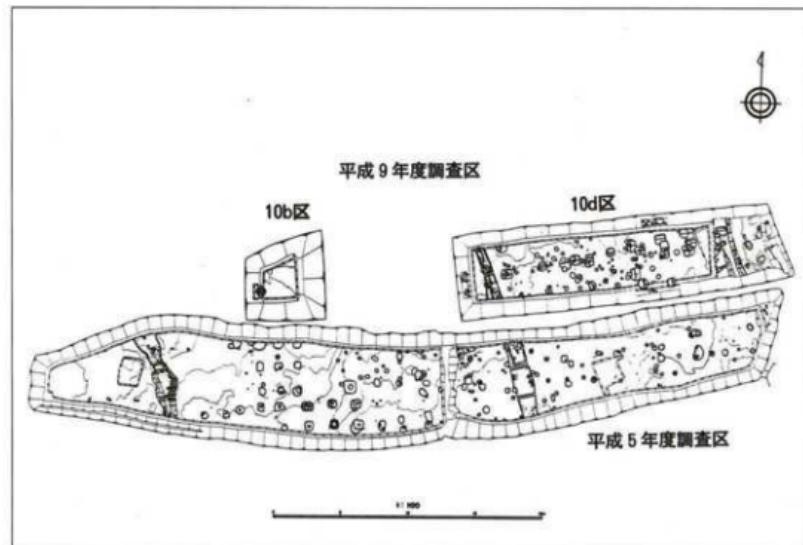


図6 小野遺跡遺構配置図

# 出雲郡家関連遺跡群の地下地質調査

株式会社日新技術コンサルタント 中村唯史

## 調査の目的と方法

これまでに行われた出雲郡家関連遺跡群（小野遺跡、稻城遺跡、後谷遺跡）の発掘調査によって、出雲郡家関連遺跡群の地質構成は基本的に、上から泥質層、礫質層、基盤岩からなることが明らかになっている。郡家に関連する奈良時代頃の遺構は、礫質層の直上部で検出されていて、礫質層上面の高度が奈良時代頃の地形面を反映していると考えられることから、その高度分布を明らかにし、未調査範囲での遺構存在の可能性を検討するためにスウェーデン式サウンディングと簡易ボーリングを併用した地盤調査を行った。調査地点を第1図に示す。

なお、礫質層上面高度が奈良時代頃の地形面を反映していると推定した根拠は次のようなことによる。

礫質層は、同遺跡後背の山地に分布する砂岩や凝灰岩の礫からなっており、後谷川などの小河川の扇状地堆積物である。泥質層には、後背の山地からは供給され得ない花崗岩質の砂層が挟まれることがあり、この地層は斐伊川の影響を受けて堆積したと判断できる。このことから、同遺跡付近は奈良時代以前は山地裾部に発達した扇状地であったが、それ以降に、簸川平野の拡大に伴う斐伊川河床高度の上昇によって後背湿地化したと考えられる。つまり、郡家関連施設の遺構の上下で堆積環境が大きく変化している。後背湿地化した時期は不明であるが、遺構が礫質層の直上にあることから、遺構が埋没し始めた時期と大きな差はないと推定できる。

### ・スウェーデン式サウンディング

先端に錐（コーン）のついたロッドに荷重（100kg）をかけて、人力で回転させながら地盤に貫入させ、貫入量あたりの回転数（貫入抵抗）から地盤の強度を求める方法。

今回は泥質層と礫質層の境界を把握することを目的として、25～50m間隔で16箇所実施した。

### ・簡易（ハンドオーガー）ボーリング

ロッドの先端に歯のついたオーガーを取付け、人力で回転させながら掘削する方法。搅乱した状態の試料を採取することができる。

## 調査結果

ハンドオーガーボーリングの結果、BPNo.1地点では地表からの深さ1~1.5mに斐伊川からもたらされた花崗岩質の砂層が分布することが明らかになった。サウンディングではこの地層は貫入量1mあたりの半回転数が50回転程度で、明瞭な砂音が聞かれる。なお、この地層から多量の地下水の湧出があったため、深さ1.5m以深についてはハンドオーガーによる試料採取は不可能であった。

小野遺跡の調査トレンチに隣接した地点で行ったサウンディングでは、奈良時代の遺構面直下に分布する礫質層は貫入量1mあたりの半回転数が25回転程度で、砂音は若干聞かれる程度であった。

以上の比較に基づいて、サウンディング結果から地層を推定して作成した本調査地の推定地質断面図を第2図に示す。

本調査地の広い範囲で、地表下1~2mに斐伊川からもたらされた砂からなる砂層が分布する。この砂層は小野遺跡の調査トレンチには分布しておらず、SP No.2と小野遺跡の間で途切れていると考えられる。

この砂層の下位には均質な泥質層が分布している。SPNo.1、SPNo.11、SPNo.12ではこの地層は薄いが、その他の地点では2~4m程度の層厚がある。

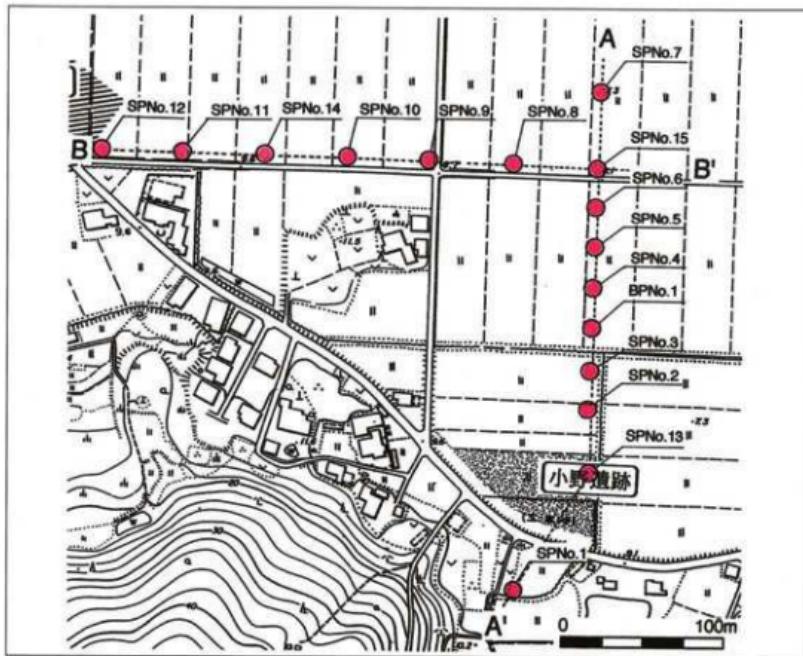
泥質層の下位には礫質層と泥質層の互層が分布している。

## 奈良時代の地形面の推定

これまでの出雲郡家閨連遺跡群の発掘調査では、奈良時代の遺構面は礫質層の直上にあることが判っている。

礫質層の上面高度は、南北断面ではSPNo.13より北側、東西断面ではSPNo.11より東側で深くなり、深さ5~6mの所にあると推定される。調査地の標高は7m前後であり、礫質層上面は標高1~2mということになる。この面が奈良時代の地形面とした場合、土地利用が出来ない高さではないが、郡家に関連する重要な施設を構築するのには低すぎるようと思われる。

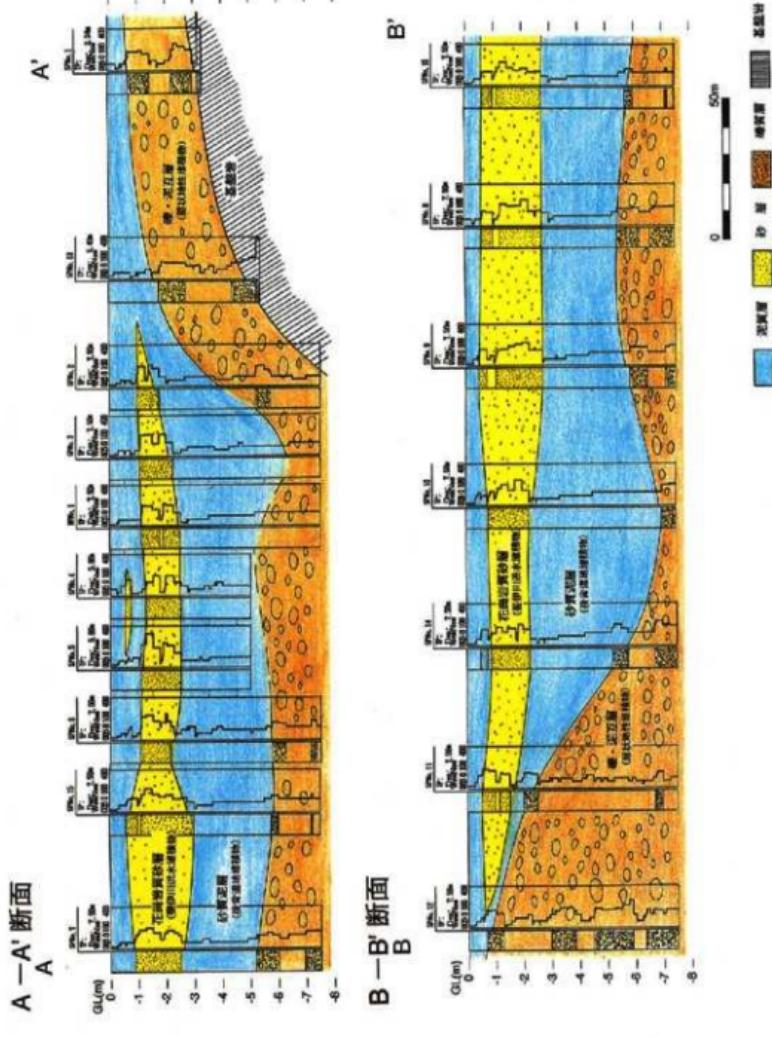
礫質層より上位の泥質層中に奈良時代の地形面（時間面）がある可能性もあるが、強度的に変化のない均質な地層であることから、後背湿地に連続した地層と推定され、遺構が存在する可能性は低い。ただし、水田などに利用されていた可能性はある。



第 1 図



SPN No. 10 試験状況



斐川町文化財調査報告 20  
出雲郡家関連遺跡群第6次発掘調査概報

発行 1998年3月  
編集 斐川町教育委員会  
〒699-0592  
島根県斐川郡斐川町大字佐原町2172  
Tel 0853(73)9190  
印刷 島根印刷株式会社